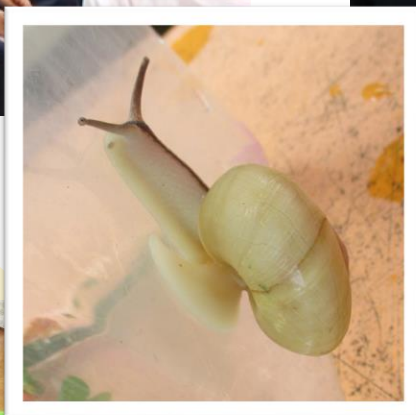


「やってみたい！」からはじまる科学する心
～カタツムリと遊ぶ経験を通して～



鳥取大学附属幼稚園

目次

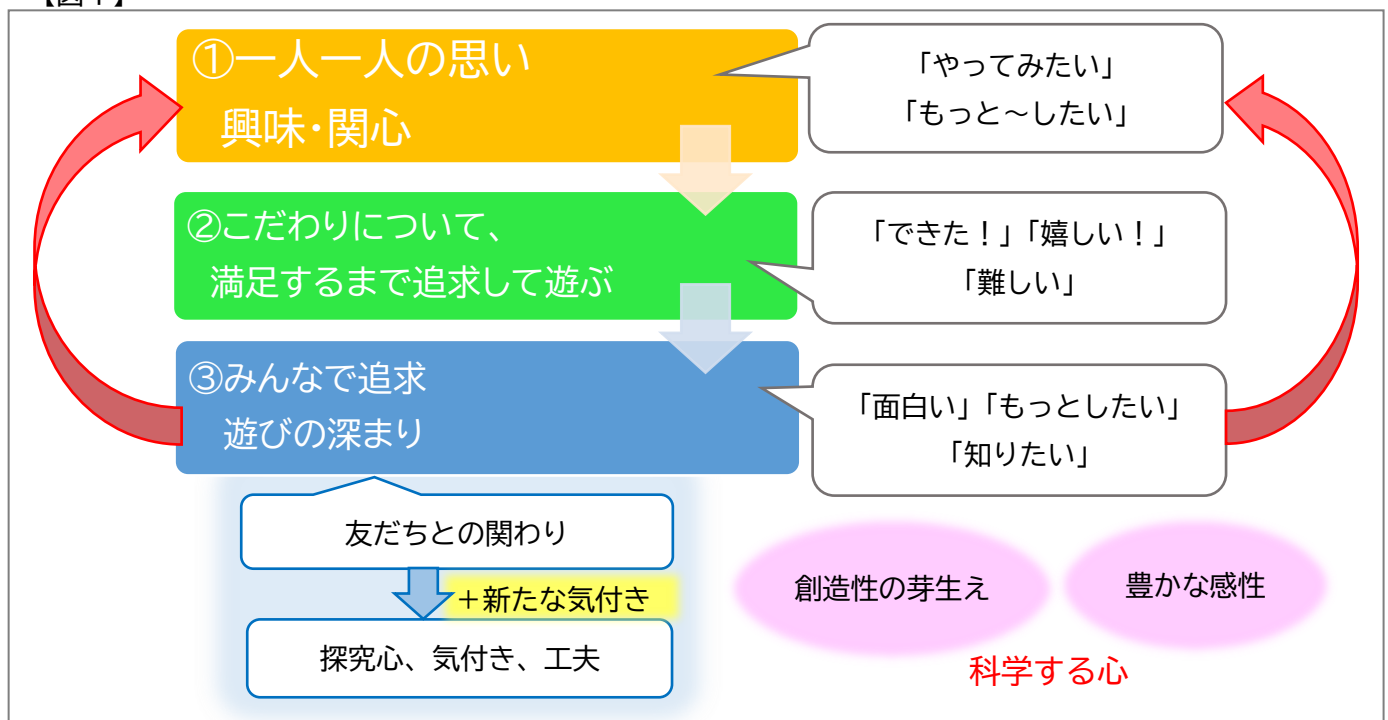
1	本園の「科学する心を育てる」について	1
2	前年度の取り組みと課題をうけて	1
3	課題と取り組みテーマの設定（4歳児クラス）	2
4	4歳児クラスの実践	4
	【カタツムリのお家つくろう】	4
	【カタツムリになりたい】	7
5	考察～フォトトークで話し合った内容をもとに「科学する心」の視点から～	11
6	その後の4歳児クラス～「科学する心」の育ちの成果～	13
7	今後の計画	14

1 本園の「科学する心を育てる」について

本園では、幼児期の子どもにとって「遊びは学びである」という考えを基に、保育を行っている。子どもたちは遊びの中で、心を動かしながら様々な経験をしていく。遊びが充実すると、自分でこだわりを追求したり、友だちと関わりながら探求・工夫し始め、生涯にわたる学習の基礎となる力が育まれていく。このような遊びの充実が、科学する心を育てていくのではないかと考える。

そこで、遊びの充実という観点から、科学する心が育っていく過程を【図1】のように表した。まず最初の段階（①）として、子どもたち一人一人の「やってみたい」「もっと～したい」という思いやつぶやき（興味・関心）を出発点とした。次の段階（②）では、意欲的に遊びに取り組みながら、それぞれの好奇心や思いを、追求して満足するまで遊ぶ。この段階では、「できた」「嬉しい」「難しい」「悲しい」など、様々な心が動く体験をする。そして、次の段階（③）では、それぞれにこだわりや思いを追求する中で、友だちとの関わりが生まれる。興味・関心が共有されることで、新たな視点が加わりながら、遊びの楽しさや面白さが深まっていく。みんなで満足するまで遊ぶ中で、「探究心・気付き・工夫」などの学びが生まれる。この各段階で見られる心の動きや、個人または友だち同士で追求して遊ぼうとする姿が、「豊かな感性」や「創造性の芽生え」などの「科学する心」を育てていくことに繋がっていく。

【図1】



2 前年度の取り組みと課題をうけて

前年度は、ドキュメンテーションや評価などをもとに、保育者が互いの保育を振り返りながら、「子どもたちが夢中になって遊ぶためにはどのように援助する必要があるか」を話し合った。子どもの遊びの姿から読み取れることや、担任外の視点からの意見など、様々な学びが得られた一方で、遊びの一場面を切り取った数枚の写真では、遊びの全体像や充実の過程が捉えづらいという課題が出てきた。そこで、本年度は子どもたちの遊びの過程や流れ、やりとりの様子が分かるように記録の仕方を工夫している。記録した子どもたちのやりとりや、遊びの発展の様子を分析しながら子どもたちの「科学する心」の芽を見取り、援助を考えることで、さらに遊びが充実し、「科学する心」が育まれるように振り返りや話し合いを進めている。

3 課題と取り組みテーマの設定（4歳児クラス）

【今回の取り組みのテーマ（ねらい）】

身近な生き物（カタツムリ）との関わりを通して、生き物に親しみ、大切にすることをもつ。
科学する心：身の回りの生き物に親しみ、命の大切さや自然の面白さに気付きながら、自分たちと同じ生き物だという気持ちをもって大切にしようとする心

【援助の方針】

子どものつぶやきや好奇心を出発点にすることを意識し、子どもたちが出すアイデアや、想像の世界を楽しむ様子を見守ったり、同じ目線で発見を共有したりする。

○テーマ設定の経緯

4歳児クラスの子どもの一人が、園外保育でカタツムリを見つけた。保育室で飼うことになり、はじめの数日は興味のある一部の子どもが様子を気にしていただけだったが、名前をつけたことをきっかけに遊びの中に取り入れるようになった。

○4歳児クラスになってからの生き物との関わり

ダンゴムシ教室



写真 1 「ダンゴムシ探し」

子どもたちは、普段からダンゴムシに興味をもち、捕まえたり観察したりして遊んでいた。そこで、大学でダンゴムシの研究をされている先生を幼稚園に招いてダンゴムシ教室を開催し、園内の松林でダンゴムシ探しをした（写真1）。石の下にたくさん隠れていることに驚いたり、一本橋を歩かせて遊んだりした。見つけたダンゴムシの性別を知りたがる子どももいた。

なりきる遊び



写真 2 「丸くなって隠れるよ」



写真 3 「ひっくり返っちゃった！」

ダンゴムシ教室で、ダンゴムシを探しながらふれあい、細かい動きを観察した子どもたちは、部屋に戻ると早速ダンゴムシになりきった（写真けになって手足をばたつかせたり、丸まったりし観察したダンゴムシの動きを模倣して楽しんだ。

園庭で探す



写真 4 「ダンゴムシ発見」

ダンゴムシ教室のあと、園庭でもダンゴムシ探しを楽しんだ（写真4）。怖がって触れない子どももいたが、見つけることや虫かごに入れることは大好きで、短時間ではあったが何日か続けて遊んだ。

観察を楽しむ



写真 5 「ダンゴムシ」 写真 6 「ワラジムシ」

子どもたちとマイクロスコープで、ダンゴムシ（写真5）やワラジムシ（写真6）を詳しく観察した。「見た目は似ているけれど、違うところがたくさんある」ということに気付いた子どもたち。子どもたちと一緒に撮った写真を保育室に貼っておくと、遊びにきた先生やともだちに、「ダンゴムシはどれでしょう」と聞いたり、得意げに答えを教えたりする姿も見られた。その後も、モンシロチョウの幼虫や、テントウムシの幼虫、園庭の花など、興味をもったものを観察した。

○4 歳児の課題

ダンゴムシ探検やなりきる遊びをそれぞれに楽しんだが、継続した遊びには繋がらなかった。特に興味をもった子どもは毎日取り組んだが、ほとんど加わらなかった子どもも何人かいた。また、ダンゴムシを探すことや捕まえること、観察することは大好きだが、虫かごに入れて遊びが一段落すると興味をなくし、逃がしたり持ち帰ったりすることもなく忘れてしまう様子があった。生き物として親しみをもって扱おうとする心や、「もっと知りたい」と興味をもって接する心を育てていく必要性を感じた。

○援助の方針

子どものつばやきや好奇心を出発点にした遊びを展開できるよう援助し、子どもたちが出すアイデアや、想像の世界を楽しむ様子を見守ったり、同じ目線で発見を共有したりする。

○遊びの概要

5月上旬 園外保育でカタツムリを見つけ、保育室に持ち帰って飼うことにする

5月中旬～ 【カタツムリのお家つくろう】

- ・飼っていたカタツムリに名前をつけ、プラスチック容器から大きなケースに引っ越しをさせる。
- ・アイデアを出しながら飼育環境を整える。
- ・図鑑を活用し、さらに飼育環境を整えたり、カタツムリの特性を生かす遊びを試したりする。

5月下旬～ 【カタツムリになりたい】

- ・背負えるカタツムリの殻を作り、なりきって遊ぶ。
- ・イメージを広げて、さらにカタツムリごっこを楽しむ。

【カタツムリのお家つくろう】（2023年5月中旬）

飼い始めて数日経ったころ、糞の様子を見るために子どもたちが集まっていると、B児が「名前つけたら？」と言った。保育者が「それいいね。どんな名前が似合うかな。」と共感すると、子どもたちでアイデアを出し合い、「くーちゃん」という名前が決まった。名前がつくと愛着がわき、今のままの容器では狭そうだからと、飼育ケースの家づくりが始まった。

文章内のマーカーはそれぞれ、子どもたちの気付きや探究心・心の動き 保育者の関わりを示す。

※【①】～【③】は図1の各段階の心の動き・工夫に対応させた。

※赤字は、特に科学する心につながると思われる姿である。

「新しいうちにお引っ越し」



写真 7 「葉っぱに乗せてお引っ越し」

新しい家にしようと、空の飼育ケースを持ってきたA児たち。カタツムリの殻をつかんで移動させようとするが、容器の壁面にはりついて離れない。新しい家に入ってほしいけれど、どうしたらいいだろう【①】、と考えていると、A児は、カタツムリがキャベツの葉っぱをよく食べているのに気付き、提案した。

A児「葉っぱに乗せたらうまいくんじゃない？」【②】

保育者は、A児の思いついた方法を認め、試す姿を見守りながらB児たちと応援することにした。

試してみると、カタツムリはゆっくりとA児の持っていたキャベツの葉に乗り、新しいケースへの引っ越しが成功した（写真7）。

B児たち「やったあ！お引っ越しが成功した！新しいお家に入ってくれたよ！Aちゃんすごい！」【③】（写真8）



写真 8 「お引っ越しが成功した！」

〈環境〉

カタツムリ、プラスチックの容器、飼育ケース、キャベツの葉っぱ

〈考察〉

A児が思いついた「葉っぱに乗せて移動させる」という方法を周りの子どもたちと一緒に応援することで、「**広いお家にしてあげたい**」というA児の思いをみんなと共有することができたと考える。自分たちで工夫したカタツムリの引っ越しが成功し、達成感を得たことで、「今度はもっといいお家にしてあげたい」というさらなる思いが生まれた。また、「自分が用意した葉っぱを気に入って乗ってくれた」と、**親しみ**を感じ、もっと触れあいたいと思ったようだった。

「お家には何がいる？（１日目）」



写真 9 「のぼってくるよ。かわいい」



写真 10 「何を入れようか」



写真 11 「とってきた！」 写真 12 「私も！」



写真 13 「お水をいれてあげよう」

飼育ケースが大きくなったことで、キャベツの葉数枚だけでは容器内が寂しくなった。「もうちょっと何か入れてあげよう」

【①】と、子どもたちは園庭に出て、家づくりをはじめた。

E 児「（飼育ケースの壁面を）のぼってくる。かわいい。」

A 児「おもしろ～い。」（写真 9）

C 児「お花も入れてあげる？」

B 児「きっと食べないよ。」

F 児「次、私にも入れさせて。」

友だち同士で話をしながら、遊びを進めていた。また、春にダンゴムシを捕まえた時の経験を思いだし、

A 児「土も入れた方がいいんじゃない？」

B 児「葉っぱ（枯れ葉）のベッド入れる？」

などのアイデアも出し合う。【②③】（写真 10）

保育者が、「E ちゃんが捕まえたときは、どんなところにいた？」と聞くと、

F 児「ベンチの下にいた！」

C 児「ちょっと濡れてた！」

と思い出しながら言った。A 児、C 児は「いいこと思いついた！」

と走って部屋に戻り、ジョウロやスプーンを取ってきた。（写真 11、12）

A 児「お水飲むかもしれない」

そう言ってストローをさしたコップも用意したが、コップは虫かごに入りきらない。代わりにジョウロで 1 センチほど水を入れた。【③】（写真 13）保育者が、「プールみたいになっているけれど大丈夫かなあ」とつぶやく。

C 児は「おぼれちゃうかも」と言って水を減らした。その間にも、カタツムリはケースの外へ首を伸ばし、子どもたちはその動きを面白がって観察した。【②③】家づくりが完成すると、コップをつかんだ A 児がスプーンに乗せてケースの中に戻した。

〈環境〉

カタツムリ、飼育ケース、園庭の土や草花、ジョウロ、色水道具（スプーン・コップ・ストロー）

〈考察〉

引っ越しが成功したことで、「もうちょっと何か入れてあげたい」という思いが生まれた。話し合いでは、**今までの経験をもとに探求・工夫**しようとする姿も見られた。友だちと関わりながらみんなで追求する中で、**カタツムリの家づくりについての関心**が高まっていった結果、自分が入れたい物を入れるだけではなく、「住みやすいようにしてあげたい」と配置を工夫したり、「これが好きそう」と発言したりするなど、**カタツムリに適した飼育環境を考える姿**が見られるようになった。カタツムリがケースの周りを好きに歩き回り、子どもたちの方に首を伸ばすと、「**喜んでるよ**」と**嬉しそうにする場面**も見られた。

「おうちには何がいる？（2日目）」



写真 14 「どんなことが書いてあるかな」



写真 15 「これも入れてあげたら？」



写真 16 「ダンゴムシのお家と似ているよ」



写真 17 「水の道あるくんだよ」

前日の子どもたちの遊びの様子から、カタツムリの家づくりや食べるものへの関心が高まっている様子【①】だったので、さらに興味をもってほしいと思い、部屋にカタツムリコーナーを作り、図鑑や飼い方ページをのコピーしたものを準備した。

一番に登園してきた A 児は早速カタツムリの様子を見にいき、昨日入れたキャベツの葉に噛み跡がついているのを見つけると喜んだ。図鑑のコピーを見て指さしながら、

A 児「これとかこれ（隠れ家、餌置き場など）入れてない、入れてあげなきゃ」【①】

と、材料を探しにいった。プリンのカップなど、使えそうな物を持ってくると、餌をのせてみながら「入るかな」と大きさを試す。やがて他の友だちも登園してくると、A 児の周りに集まってきて、家づくりの続きが始まった。A 児のしていることを見て、石など、入れたいものを園庭に探しに出かける子どももいた。

B 児と D 児は図鑑に興味をもち、テラスに持ってきて2人で一緒に見始めた。【②③】（写真14）

B 児「これも入れてあげたら？」

D 児「（冬眠の環境の絵を指さして）ダンゴムシのお家みたいなのが載ってる！」（写真15、16）

と提案したり【②③】、発見したことを話したり【②】した。

C 児はさらに、「水で道をつくるとカタツムリが歩く」ということを知り、早速試した。テラスで4歳児がカタツムリと触れあっている様子を見た3歳児も興味をもって遊びに来た。（写真17）



写真 18 「いっしょに撮りたい」

C 児は、部屋に戻ってから、「くーちゃん」と羽化したモンシロチョウのツーショットを撮ることも思いついた。（写真18）

〈環境〉

カタツムリ、飼育ケース、園庭の土や草花、図鑑のコピー、あるあるコーナー、スプーン、石、あるあるコーナー、隠れ家になりそうな鉢のかけら、空き容器（プリンカップなど）、タブレット

〈考察〉

図鑑コーナーを作り、本物を知るためのアプローチをしたことで、前日の段階で抽象的だった家づくりのイメージが具体的な姿で共有されたのではないかと考える。一方で、作りたいカタツムリの家イメージがはっきりしたことで子どもたち同士で相談する場面は前日に比べると少なくなり、個々の子どもが「これがまだないからいれてあげよう」と探しに行く姿が増えていた。家づくりが一段落すると、図鑑を見たりカタツムリと触れあったりする中で、「食べる物に興味がある子ども」「動きを面白いがる子ども」「カタツムリが過ごしやすい家づくりをさらに追求したい子ども」「カタツムリの習性に興味がある子ども」など個々の興味の方向が広がりを見せた。

【カタツムリになりたい】（2023年5月中旬から6月にかけて）

4月にダンゴムシになりきって遊んでいたことを活用するため、カラーポリ袋を準備していると、D児が「カタツムリをつくる」と保育者に言いにくた。保育者が、「カタツムリを作りたい？それともカタツムリになりたいということ？」と尋ねると、「**なりたい！**」と答えたので、背負って遊べるカタツムリの殻を作ることになった。

「カタツムリになって遊ぶよ」



写真 19 「どんなご飯にしようかな」

D児とA児の分の殻ができると、2人は早速背負って遊び始めた。

D児が「**カタツムリのご飯作ったら？**」【①】と提案する。保育者は、「**それいいね。何色があったらいい？**」と、子どもと相談しながら画用紙の準備をした。

D児「Dくんは……ニンジンと……リンゴつくる！」

A児「Aちゃんもニンジン作る」

D児に続いてA児の分も準備していると、D児はカタツムリコーナーから図鑑のコピーを持ってきた。

2人は殻を背負ったまま製作を始めた。【②】（写真19）作りたかった食べ物が出来ると、今度は「**お家をつくろう**」と思いついた。

「**何があったらいい？**」と尋ねると、A児は「**大きい段ボールがほしい**」と答える。

固い段ボールで切りにくいところや、「ここに窓を開けてほしい」という、子どものイメージにあわせて手伝いながら作っていると、C児も「**入れて**」とやってきた。

A児「Cちゃん、ここ持っててね」

C児「次はここを貼ってね」

D児「Dくんここ貼るから」【③】

と、協力しながらガムテープを貼り、段ボールが自立するようになった。（写真20）

C児「**レストランの時みたいに、おうちって書いて貼って**」

家の形が出来てくると、A児、D児、C児は喜んで中に入った。（写真21）楽しそうにしている様子を見て、他の友だちも次々に「**入れて**」と仲間に加わった。カタツムリになりきったり、なりきっている友だちをお世話したりするごっこ遊びが始まった。（写真22）



写真 20 「一緒にお家をつくるよ」



写真 21 「おうちが出来たよ」



写真 22 「葉っぱをどうぞ」



写真 23 「雨が降ってきた」



写真 24 「葉っぱおいしいね」

遊んでいるうちに、部屋の前を通りかかった3歳児も「カタツムリのお家」に入り、遊びに加わる。

子どもたちの「お家」のイメージがさらに広がるように2枚のシートを屋根にすると、

A 児「いいこと思いついた！」

と言って、青と水色の紙テープをちぎってきた。シートに次々貼り付けながら、

A 児「大変！雨がふってきた」

と知らせる。A 児の姿を見た D 児も同じように、水色の紙テープを家の側面に貼り始めた。

中で遊んでいた子どもたちもそれを聞いて、

B 児「雨だ！おぼれちゃう！」

と言って丸くなった。【③】(写真23)

D 児は次に、

D 児「葉っぱ、はいどうぞー！」

と作った葉っぱを差し入れた。B 児、F 児が食べ始める。

一緒にいた3歳の友だちも、4歳児の様子を見て、動きや言葉を同じように真似して楽しむ姿が見られた。(写真24)

〈環境〉

カラーポリ袋、新聞紙、色画用紙、飼育ケース、図鑑のコピー、段ボール、ボール紙、ガムテープ、紙テープ、シートなど

〈考察〉

本物のカタツムリの動きを見たり、家づくりの遊びで好きな食べ物、環境について知ったりという経験をしていたことで、4月のダンゴムシ遊びと比べ、動きの模倣だけではなく、製作や想像の世界への広がりが見られたのではないかと考える。「雨が降ってきた」と遊ぶ場面では、家づくりで、水を入れてあげたときに、「入れすぎると溺れてしまうかも」と話していたことを覚えており、遊びの中で探求・工夫した結果で得た知識が遊びに生きていたのではないかと感じた。

この日、製作の段階から興味をもった子どもは2人だったが、「カタツムリって面白い！」という体験をみんなですしていたことや、普段からごっこ遊びに親しんでいる子どもたちが興味をもって加わり、自分たちの遊びたい世界観を実現するために思いついたアイデアを次々に取り入れながら遊んだ。

「私カタツムリ！名前は……」



写真 25 「目玉もつけたい」



写真 26 「オオカミから隠れるよ」



写真 27 「カタツムリさん、葉っぱだよ」



写真 28 「友だちのくーちゃんだよ」

次の日、A 児の遊ぶ姿を見て、前日は作らなかった子どもも殻を作った。【①】

殻作りの材料と一緒に、目玉もつけられるように材料を準備しておく、A 児、D 児も「目玉作りたい」【①】とやってきた。(写真25)

A 児「A ちゃん自分で作れるよ。」

A 児は材料を取りに行き、頭に付ける仕組みを自分で考え、テープで補強するなど試行錯誤しながら完成させた。また、C 児は目玉だけでなく尻尾を作ることも思いつき、材料を組み合わせて作った。【②】

A 児「私の名前はハートちゃんね」

C 児「じゃあ私はプリンちゃんね」

B 児「私はプリンセスカタツムリになる」

A 児「A ちゃんもハートプリンセスにする」

と、友だち同士で会話をしながらどんどんイメージを広げていき、「プリンセスカタツムリごっこ」「カタツムリ幼稚園」

「オオカミから隠れるカタツムリごっこ」など、様々な設定を考えながら遊び始めた。(写真26)

はじめは図鑑をもとにして作ったカタツムリの家にも、座布団、電気（ろうそく）、エアコン、テレビ、リモコン、机など、子どもたちが「これがあったら楽しそう」と発想したものが増え始めた。【③】

普段からお店屋さんごっこが好きな子どもたちは、今までに作ったパフェやゼリーに加えて、カタツムリ用に作っていたニンジンや葉っぱも家に届けて遊び始めた。【③】(写真27)

保育者が、「プリンちゃんとハートちゃんがお客さんなんだね。2人以外にももっと、お客さん来てくれるといいなあ」と声をかけると、C 児はカタツムリコーナーから「くーちゃん」の飼育ケースを取ってきた。(写真28)

C 児「友だち、連れてきたよ」

一緒に遊んでいた他の子どもたちも自然に受け入れた。

E 児「くーちゃんどうぞ」

「くーちゃん」の前にもお盆に乗せたパフェを運んできた。

C 児「こっち見てる」

A 児「くーちゃんもニンジン食べてるよ」

D 児「カタツムリレストランだよ」【③】

〈環境〉

カタツムリのおうち（段ボール製）、作ったカタツムリのごはん、アルミホイル、広告紙、すずらんテープ、ダンボール、ままごとコーナー、ままごと道具、カタツムリの飼育ケース、絵本

〈考察〉

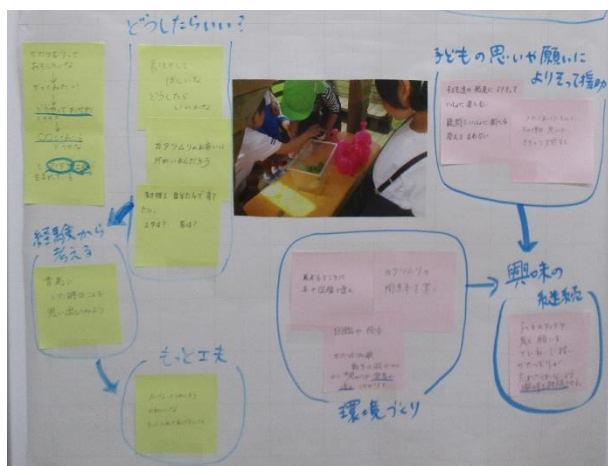
カタツムリになりきった自分たちにも名前を付けたことで遊びが盛り上がり、実際のカタツムリの虫かごに入れた物と自分たちの生活経験の中で触れている物を融合させて遊ぶ様子が見られた。なりきることで、**自分たちを通してカタツムリのことを知るという、このクラスの子どもたちならではのアプローチ方法**であると感じられた。

飼育ケースの家づくりが一段落し、ごっこ遊びが始まってからも、毎朝の登園後や園庭遊びから戻った後などにカタツムリの様子を気にしている姿があり、**糞をたくさんして汚れているのを見つけて「洗ってあげたい」と言いにくることもあった**。カタツムリになりきる子どもと、殻を背負わずにままごと遊びをする子ども、家にどんどん作った物を付け足すのが楽しい子どもなど、興味の方向は皆が同じではなかったが、最終的には「カタツムリレストラン」になり、友だち同士で関わりながらごっこ遊びの世界観を楽しんだ。カタツムリになった自分の「お友だち」として「くーちゃん」を連れてくる場面は、名前をつけたカタツムリと関わりながら遊ぶという経験の中で、生き物の**面白さ**に気付いたり、自分なりの**発見**をしたりして**親しみを持ち、自分たちと同じ生き物として大切にしようとする心が表れた**ものではないかと考える。

5 考察～職員研修で話し合った内容をもとに「科学する心」の視点から～

職員研修では、各年齢で子どもの遊びの様子の写真を持ち寄り、話し合いを行う。黄色い付箋に子どもの心の動き、ピンクの付箋が保育者の援助について気付いたことを書き込んでいく。その内容も合わせながら、「科学する心」が育っていく過程（図1）を考察する。

「お家づくり」



話し合った内容（抜粋）

- ・ 子どもたちの「どうしたらいいんだろう？」という心の動きが見られる。経験を生かして考え、さらなるアイデアや工夫が生まれる。
- ・ 保育者は子どもたちの願いや思いに寄り添って援助していくことが大切である。答えを教えてしまうのではなく、疑問を一緒に調べることや、共感しながら関わることで、意欲を高める。
- ・ 図鑑を活用し、歌や絵本、動きの遊びなど、子どもたちが愛着をもつことができる環境づくりも有効である。カタツムリが忘れられないように、興味を継続させる。

写真 29 「職員研修で話し合った記録(お家づくり)」

① 一人一人の思い・関心……好奇心の広がり

「カタツムリのおうちをつくりたい」という子どもたちの関心が出発点になったが、遊びが進んでいく中で、「広くしたい」「いろんなごはんを入れてあげたい」「図鑑みたいに環境を整えてあげたい」と、個々の興味の分岐や広がりがあった。子どもたちが「(餌やお家は) どうしたらいいんだろう？」という思いをじっくり追求して遊べるよう援助することで、「カタツムリのお家」という抽象的なイメージが具体的になり、「〇〇してみたい」という思いもさらに具体的になっていったのだと考えられる。

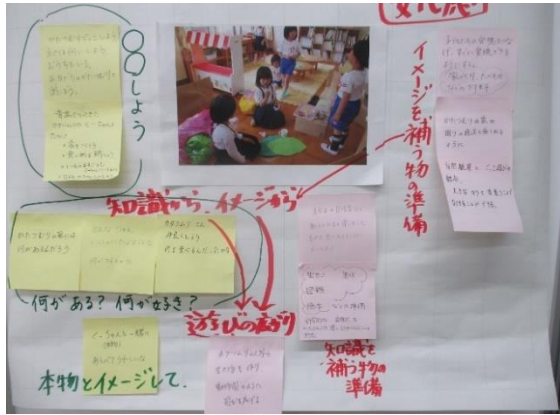
② こだわりについて、満足するまで追求……予想と想像から、アイデアを試す

「これを入れてあげたい」「これが好きかも」と子どもたちなりに予想しながら、試そうとする姿が、創造性の芽生えに繋がると考えられる。関わりながら動きの面白さに触れたり、自分の行動と関連付けて「喜んでくれた!」とカタツムリの気持ちを考えたりすることで、生き物に親しむ気持ちが育まれた。

③ みんなで追求・遊びの深まり……それぞれの経験とイメージの共有

自分の経験を思い出しながら追求して遊ぶ中で、友だちの発言を聞いて「たしかにそうだった!」と一気に遊びが活発になる場面があった。友だちと「こうしたい」というイメージを共有することで、それぞれの子どもがもっていた興味の側面から、新たなアイデアの提案ややりとりが生まれた。うまくいかないときには一緒に考えることで気付きが生まれ、うまくいったときには「できた! もっとこうしてみたい!」と達成感や次に繋がる好奇心が生まれた。

「カタツムリになりたい」



話し合った内容（抜粋）

- ・ 「〇〇しよう」「〇〇はどうしようかな」など、思いがたくさん生まれる。
- ・ カタツムリの家にあるものや、好きなものに関する知識と、子どもたちのイメージの両方から遊びの広がりにつながる。
- ・ 保育者は、子どもたちの空想をつなげ、子どもたちが実現に向けてとりくめるように環境を整えるなどの援助が考えられる。イメージを補う物と、知識を補う物の準備をする。
- ・ 遊びの広がりを考える。

写真 30 「職員研修で話し合った記録(カタツムリになりたい)」

① 一人一人の思い・関心……実際の関わりから想像を広げる

「カタツムリを作りたい」という子どもたちの関心が出発点になった。想像したものをイメージ通りに実現したいという思いから、飼育ケースの実物や図鑑を自分たちで見に行き、参考にしながら製作しようとする姿が見られた。製作に興味がある子どもから遊びが始まったが、ごっこ遊びに使えるものが揃ってくると、他の子どもたちも興味・関心が高まり、遊びに参加していった。

② こだわりについて、満足するまで追求……遊びや生活の経験を土台にする

今までのごっこ遊びで「使いたい物を自分で考えて作る」経験を積んでいたため、今回のカタツムリごっこでも自分のイメージしたことを実現するために何があると楽しいかを考える姿が見られた。その際に、カタツムリとの関わりや飼育ケースの中のことだけではなく、自分たちの生活経験を取り入れながら遊ぶ姿がみられた。子どもたちのイメージした物を実現できるよう、材料を準備したり、子どもと会話しながら遊ぶ中で友だちにもその子どものイメージを伝える援助をした。

③ みんなで追求・遊びの深まり……それぞれの興味が融合して、イメージが膨らむ

友だち同士で名前や世界観を伝え合いながら遊ぶことで、「私もそうしたい」と取り入れたり、「じゃあ私はこうする!」と自分なりのアイデアを出そうとしたりする姿がみられた。本物のカタツムリと自分たちで作った想像のカタツムリを行き来しながらごっこ遊びのイメージを膨らませたり、ごっこ遊びの中でも特に興味がある部分（家づくり、なりきること、今までのままごと遊びの設定）の異なる子どもたちが関わり合ったりすることで、遊びが充実した。

【今回の遊びで課題だったこと】

背負う形の大きな殻を製作したことでカタツムリになりきって遊ぶことができると考えた。作った殻を最後まで背負って楽しむ子どももいたが、ごっこ遊びに使う物を作りたいと思ったときに、そのままでは殻が邪魔で椅子に座ることができなかつたり、自分たちで作った家に入ると身動きが取りづらかつたりした。動かたび友だちに当たってしまい「痛かったよ」「ごめん」というやりとりで遊びが中断になるため、使わなくなっていく子どももいた。保育者は無理に背負わせずそのままにし、背中に貼り付ける平面の殻も作ってみたところ、背負う殻をやめてしまった子どもたちも背中につけてなりきる遊びを再開した。自分たちの名前を決めたり、カタツムリになったまま年長組の部屋まで廊下を歩いて遊びに行ったりする様子も見られた。しかし、後日の職員研修で、カタツムリと自分たちの身体の違いに気付かせたり、大きな殻を背負って生活するカタツムリについて想像を広げたり機会にもなり得たことに気付いた。今後の遊びでは、さらに子どもの探究心や興味・関心を深めるアプローチを考えていきたい。

6 その後の4歳児クラス～「科学する心」の育ちの成果～

カタツムリになりきるごっこ遊びが一段落し、作った殻を持ち帰った。

その後も、引き続きカタツムリに興味をもって関わりながら、園庭で見られる生き物との関わりを楽しんでいる様子が見られる。



写真 39 「くーちゃんの種類が知りたい」

餌を入れたあと、図鑑を見ながら、カタツムリの種類を確認する。(写真39)

A 児「これかな？」

C 児「見てみるね……ちがうよ。この模様ないもん」

A 児「じゃあこれ？」

C 児「そうそう、これだよ」

カタツムリの継続的なお世話と興味
→命ある生き物と関わる態度



写真 40 「葉っぱにいた小さい虫を見てみたい」

A 児「(カタツムリの餌を取りに行った先で、キャベツの葉を見て) なんかちっちゃいのがついてる」(写真40)

C 児「おふとんかぶってるよ」

A 児「これチョウチョじゃない？」

F 児「さわってみたい」

A 児「名前はりんちゃんにしよう。先生、(名前を書きたいから) 紙ください」

もっと詳しく知りたい！見てみたい！と好奇心をもって関わる姿



写真 41 「この青虫のことが知りたいな」

A 児「みんなー！来て！青虫がいる！」

E 児「待ってて！」(図鑑を取りに走る)

A 児「飼いたい」

C 児「この子なんて子かなあ」

E 児「これじゃない？」

C 児「ねえ、この子毒ある？」(写真41)

図鑑を見れば名前や飼い方が分かる！という経験を生かす様子

6 今後の計画

本園では保育の質の向上を目指して、記録をとって保育の様子をまとめ、保育者同士で語り合っている。本年度は、月に1回、写真を元にした話し合い（フォトトーク）と、「子どもたちの遊びの過程や流れが分かる記録」により、遊びの流れに沿って、客観的に保育を見直したり、子どもの心の動きやその時々への援助について分析したりしている。

科学する心を育てるためには、充実した遊びの中で、子どもたちが心を動かしたり、考えたりするための環境づくりが不可欠である。そのためには、「遊びが充実する」ためにはどうしたらよいか、保育者が考え、日々意識していくことが大切だと考える。今回の課題でも挙げたように、子どもたちがさらに考え、探求したくなるようなきっかけを逃さずに援助していくために、記録や語り合いの中で保育者自身も視点（子どもの遊びを見取る目・援助のタイミングをはかる目）を増やしていく必要がある。そのような視点を養う場として、担任の視点だけではなく、さまざまな視点で保育者が語り合う研修に引き続き取り組んでいく。子どもたちが幼稚園でそれぞれの興味・関心を深め、友だちとの関わりの中で遊びを充実させていくように、保育者の援助のあり方を研究し、子どもたちの科学する心を大切に育んでいきたい。

研究代表者 寺川 志奈子

執筆者 坂本 陽菜